寒甚ケレバ片愈美ナリ、凡ソ物方體ハ必八ヲ以テ一ヲ圍ミ、圓體ハ六ヲ以テ一ヲ圍ムコト、定理中ノ定數誣ベカラズ、雪花ノ六出ナルユヘンモ亦コレノミ、立春後ノ雪、ミナ五出ノ説アレドモ取リ難シ、水已ニ雪ニ變ズレバ、重體忽チ二十四分ヲ減ジ、輕飄毳ノ如ク、花形万端都テ六出、星辰ノ芒角ノ如ク、其狀整正、其質潔瑩、實ニ賞スルニ堪タリ、其精白ニシテ他色ヲ雜ヘザルハ、光線ノ盡ク反射ヲ致スルニヨル、雪モシ黑色ナラバ四望幽暗、豈堪フベケンヤ、西土雪花ヲ驗視スルノ法、雪ナラントスルノ天、預メ先黑色ノ八絲緞ヲ氣中ニ晒シ、冷ナラシメ、雪片ノ降ルニ當テ之ヲ承ク、肉眼モ視ルベク、鏡ヲ把テ之ヲ照セバ、更ニ爍タリ、看ルノ際氣息ヲ避ケ、手温ヲ防ギ纖鑷ヲ以テ之ヲ箝提スト、余文化年間ヨリ雪下ノ時毎ニ、黑色ノ髹器ニ承テ之ヲ審視シ以テコノ圖ヲ作ル、雪其形質ヲ美ニスルノミナランヤ、功用マタ少カラズ、〇中略

壬辰〇天保三年　夏六月

許鹿　源利位述

〔伊勢物語上〕むかしみなせにかよひ給ひし、これたかのみこ、れいのかりしにおはします、ともにむまのかみなる翁〇在原業平つかうまつれり、〇中略かくしつゝまうでつかうまつりけるを、思ひの外に御ぐしおろさせ給うてけり、むつきにをがみ奉らんとて、小野にまうでたるに、ひえの山のふもとなれば、雪いとたかし、さゐてみむろにまうでゝをがみ奉るに、つれ〳〵といと物かなしくておはしましければ、やゝ久しくさぶらひて、いにしへの事など思ひ出て聞えけり、さてもさぶらひてしがなとおもへど、おほやけ事ども有ければ、えさぶらはで、夕ぐれにかへるとて、

わすれては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは、とてなんなく〳〵きにける、

〔東遊記三〕文武の餘風　佐々成政越中を領せし頃、敵に圍れ勢屈して、外に味方の助け無れば、我城をだに守り兼し折ふし、きつと思案をめぐらし、濱松は兼てのちなみなれば、みづから行て救ひを求んと欲すれども、四方皆敵に圍れて出べき道なし、折節極月〇天正十二年廿七日の事なれば、夏の日だにも雪消ぬ、越中立山麓より峰まで、數丈の雪封じて禽獸さへ通ひ得ざる時なれば、敵も